

「地域共生のいえ」が生み出すつながり - 「岡さんのいえ TOMO」を中心に - The Connection Created by 'Chiiki-kyosei-no-ie' Case Study of 'Oka-san's house TOMO'

キーワード：『まちの居場所』『地域共生のいえ』『空き空間の活用』

後藤 智香子

GOTO, Chikako

(東京都市大学環境学部環境創生学科 准教授)

1. はじめに

本稿では、世田谷区での居場所づくりの実践事例として、「地域共生のいえ」を取り上げる。2章でその仕組みと背景を概説した上で、地域共生のいえの一つであり、著者が約10年以上運営メンバーとして関わる「岡さんのいえ TOMO」（以下、岡さんのいえと記す）の成り立ちと取り組みを紹介したい。そして、この場所で生み出されているつながりについて考察を試み、孤独・孤立に対するこうした居場所づくりの意義を考える。

2. 「地域共生のいえ」とは

「地域共生のいえ」とは、「世田谷区内の家屋等のオーナーが自己所有の建物を活用して主体的に行うまちづくり活動とその拠点」を指す。(財)世田谷区都市整備公社(現在は一般財団法人世田谷トラストまちづくり。以下、財団と記す)が創設した「地域共生のいえづくり支援事業」制度に基づき登録された場である(図1)。

2.1 地域共生のいえづくり支援事業制度の創設背景

財団が地域共生のいえづくり支援事業を創設したきっかけは、2001年、相続に伴って広大な土地の一部を売却せざるをえなくなった土地所有者から財団への相談だった。この所有者は、江戸時代から続く家の当主で、相続の際、



図1 地域共生のいえのパフレット

(出典：参考文献1)

自分が育ち、受け継いだ築 150 年の古民家と樹齢 200 年の樺などの屋敷林がある風景を守り、地域に何らかのかたちで資する場にしたいという思いがあった。しかし一般的な方法で売却すると、更地になり、没个性的な集合住宅やミニ戸建てが建ってしまうことが多い。財団は、建築やまちづくりの専門的知識をもつ NPO 法人などに呼びかけてアイデアを募り、これを所有者に紹介した。所有者は NPO 法人などからの提案を受け入れ、相続税を支払うために売却せざるをえなかった敷地には、大きな樺が保全され、環境共生型コーポラティブハウスが実現した。また、隣接して残された古民家はシェアハウスとして活用が図られた。2つの建物に挟まれた境界は、通常は塀や柵が設置されてしまうが、ここではそうした塀柵を設けず、かつての佇まいを残し、従前の緑の環境が保全された。財団は、この事例の経験を通して、専門家への業務委託などによる技術的支援を行うことで、場の価値が継承されることやコミュニティ形成に資する場が生まれる可能性を認識し、仕組みとして制度化した。

2.2 地域共生のいえづくり支援事業制度を通じた支援の仕組み

当制度は、2004 年にモデル事業として創設され、その後の実績が評価されたことから 2006 年度に本格的な取り組みへと移行している。

財団は支援実績を重ねるなかで、当制度による支援手法を確立してきた。2014 年には「地域共生のいえづくり支援要綱」を制定し、支援要件や支援手法などを定めた（表 1）。なお、開設前の支援は建築やまちづくりの専門家に業務委託を行う場合もある。

表 1 地域共生のいえづくり支援事業制度を通じた支援の仕組み（参考文献 2 を参考に著者が加筆して作成）

開設前の支援	① 構想支援	プランニング <ul style="list-style-type: none"> ● 周辺調査（地域資源、人口統計、地域ニーズなど） ● オーナーの意向の整理 ● プランニング（活動案の策定）
	② 試行支援	自立的な運営の確立 <ul style="list-style-type: none"> ● 広報活動（チラシの作成/配布） ● 試行活動 ● 運営体制と運営ルールの構築
	③ 開設支援	地域へのお披露目 <ul style="list-style-type: none"> ● 地域共生のいえ憲章の作成 ● 開設セレモニーの実施 ● 地域共生のいえプレートの贈呈
開設後の支援		情報発信支援：「地域共生のいえかわら版」の発行など 情報交換の場づくり：オーナーや運営協力者の情報交換の場づくりなど

「地域共生のいえ」としての登録要件は、要綱上では「建物を公益的なまちづくり活動の場としての供すること」や「登録後 3 年以上活動を継続する意思があること」などが示されているが、制度運用上はオーナーの「主体性」や「自律性」が重視されている⁽¹⁾。公益的なまちづくり活動としては、①子どもたちの地域の居場所、②子育て支援の場、③高齢者や障

害者の暮らしを支える場、④地域まちづくりを啓発・支援する場、⑤地域の人々の交流を広げる場、⑥その他地域共生のまちづくりに寄与する場、と示されているが、オーナーの思いや地域の状況などが尊重されているため自由度が高い。

2.3 「地域共生のいえ」の現在の概況（図2）

財団 HP によれば、2023 年 12 月時点で、23 カ所の「地域共生のいえ」が登録されている。制度が創設されてから 20 年近く経つため、登録を終了した取り組みも数カ所ある。

オーナーの思いや建物、地域のニーズなどにより、それぞれ取り組みは異なり、個性がある。財団 HP に掲載されている各地域共生のいえの紹介文を読むだけでも、各いえの個性が感じられる。例えば以下の通り。

- ・ らくらくハウス：「地域のみんなでつくる、みんなの居場所」として、障害の有無も、大人も子ども、学校に行く行かないも区別なく、ごちゃまぜで誰もが学び合え、助け合える地域を目指して日々取り組んでいます。子どもたちが企画・運営する駄菓子屋さんが開店することも。学校の授業に不安がある子や、ホームスクーラーへの学習支援も行っています。」
- ・ あばら屋 春夏：「自宅で家族を介護する方々に、ティスプーン一杯の気分転換をしていただきたい。そんなオーナーさんの想いから、話をしてもいい、話をしないでぼんやりしてもいい、利用される方が自分のスタイルでほっと一息つける場としてオープンしました。」
- ・ 在林館：「分譲されてから 80 年を迎えた住宅地の一角。生垣のアプローチの先にある平屋の離れを地域の方々が気軽に立ち寄れるギャラリーとしてオープンすることになりました。豊かな木々に囲まれ、木漏れ日射す室内で過ごすひとときは時間を忘れさせてくれるようです。この場所に合った企画展をオーナーさんご自身が考えながら、地域の方々との出会いの場、交流の場、情報発信の場としてゆっくり広がっていくことを楽しんでいます。」

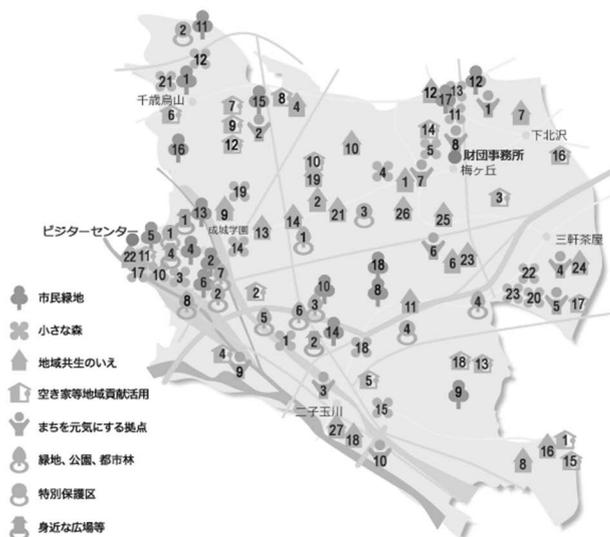


図2 地域共生のいえの位置図（出典：参考文献1）

3 「岡さんのいえ TOMO」の成り立ちと取り組み

3.1 成り立ち

岡さんのいえは、京王線上北沢駅から徒歩5分ほどの住宅街の中にある。元々、戦後すぐに2人の女性（岡さんとIさん）が建てた住宅であり、岡さんらはこの住宅で近所の子どもたちにピアノや英語を教えていた。岡さんの姪孫にあたる現オーナー（Aさん）は、自身が子どもの頃、よくこの家に遊びにきており、岡さんの「この家は私の子どものようなもの。地域の皆さんにこの家を使ってほしい」という思いを託された。Aさんは、岡さんの思いをかたちにする方法について検討していた際、財団職員から当該制度を紹介された。Aさんは、この制度ならば岡さんの遺志を実現できるかもしれないと制度利用を申し込んだ。その後、専門家による技術的な支援を受け、2007年に地域共生のいえとしてオープンした（図3）。



図3 岡さんのいえ TOMO の外観

3.2 主な取り組み

以下、時系列で主な取り組みを紹介する。

3.2.1 開設初期

当初はオーナーAさんのみで運営をしていたが、オープン後間もなくして、世田谷トラストまちづくり大学²⁾の講座卒業生が5名ほど運営に加わった。このメンバーの殆どがシニアの男性で、リタイア後に地域やまちづくりのことを知る一つの機会として講座受講を決めた人も多かった。広告代理店のコピーライター、マンガ雑誌編集者、法人役員、ディスプレイ会社のデザイナーなど第一線で働いてきた人たちでもあり、さまざまなスキルや見識の持ち主である。岡さんのいえが大事にしている「まちのお茶の間」というキャッチフレーズは、彼らとAさんとの議論のなかで生まれたものである。なお、現在オープンから15年が経ち、岡さんのいえの現場を引退したメンバーもいるが、今でも現場を支えてくれているメンバーもいる。

オープン当初は、こうした運営メンバーが不定期でイベントを企画開催した。そのほか、地域の子育てグループとつながり、主に乳幼児とそのママを対象とした子育てサロンを定期的に開催した。2010年頃からは実家で駄菓子屋を営んでいた人が運営メンバーにいたこともあって、駄菓子屋も始めた。

また、この頃から続けている活動として「開いてるデーカフェ」（時期によって開催頻度は異なるが現在は隔週開催）がある。対象を限定せず誰でも利用できる交流の場で、オープン当時は定期的な利用が殆どなかったことから専門家のサポートを受けて始めた。岡さんが遺したレシピを再現してお菓子をつくり、それを提供することなども試みた。

3.2.2 地域への展開、定期的な活動の充実

オーナーA氏はこの上北沢地域に住んでおらず、開設当時は地域とのつながりは薄かった。しかし、地域のお祭り（桜祭りや児童館の文化祭など）に出店するなど、地域から声がかかればできるだけ足を運び活動を周知してきた。徐々にさまざまなつながりが生まれていき、例えば児童館のイベント時の子どもたちの宿泊先などとしても岡さんのいえが活用されるようになった。

また、駄菓子屋に来てくれた小学生が、「岡さんのいえに遊びに行った」と日記に書いたことから、小学校の先生が来訪、岡さんのいえの活動やメンバーを知ってもらう機会もあった。このご縁がきっかけとなり、岡さんのいえのメンバーが小学校の総合学習の授業で囲碁や絵画、工作の講師役を務め（2010年より）、Aさんは小学校運営委員会の委員にもなった。

そのほか、利用者の増加をねらいとして、定期的な活動の充実を図った。具体的には、運営メンバーの発案で2015年に開始した「サンデークラブ」がある。各メンバーが得意分野を活かして講師役を務めている。水彩画、鉄道、囲碁、手芸のクラブが生まれた（当初は週1回開催、現在は鉄道のみで月1回開催）。根強い人気があるのは「鉄道」である。岡さん

のいえの続き間や縁側空間を活用して線路を並べ、老若男女問わず車両を走らせながら鉄道を楽しむユニークな場になっている。

3.2.3 建物改修プロジェクト

岡さんのいえは、地域共生のいえとしてオープンする前に最低限の耐震補強工事、内装改修工事を行った。しかし、活動を展開するなかで、元々は個人宅であることから、みんなで一緒に料理したり食べたりするには使い勝手が悪いこと、2011年の東日本大震災の揺れには耐えたが、耐震性が低いことが大きな課題となってきた。また、岡さんのいえでは単年度の外部資金を主な運営財源として活動を続けており、今後の活動継続のための費用を安定的にいかに確保し、固定資産税や建築物の維持費、活動事業費を捻出するかが課題となっていた。

そこで、2015年に「耐震改修&みんなのキッチンづくりプロジェクト」を立ちあげた。耐震補強工事を喫緊の課題と認識した上で、安定的な収入確保のためにコミュニティスペースとしての空間の魅力を高めることが主たる目的である。改修にあたっては、財団や地元建築士、地元企業などの支援を受け、クラウドファンディングにも挑戦した。多くの方の協力を得て、プロジェクトを達成することができた。

3.2.4 理念や事業内容などの見直し

建物改修プロジェクト後、運営メンバーで改めて岡さんのいえとしての団体のカタチについて話し合いを重ねた。岡さんのいえはスタート時から現在に至るまで、一貫して任意団体であるが、将来的な法人化も視野に入れながら、理念や会則、事業内容など検討をした。

このときの議論を踏まえ、「活動で大切にしたいこと」として皆で描いたものが図4である。このカタチは今でも変わっておらず、運営で迷うことがあると、このカタチや理念と照らし合わせて岡さんらしさを再確認することが多い。みんなの「まちのお茶の間」をつくる、をミッションとし、具体的な事業内容は以下の通りである。

【日常交流事業】駄菓子屋や「開いてるデーカフェ」、「サンデークラブ」など、対象を限定せず、誰でも気軽に居られる居場所づくり。また、2019年頃より世田谷区のおんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）と連携して、「保健室カフェ」をスタートさせた（月1回）。お茶を飲みながら気軽に健康や生活のことなどについて看護師さんに相談したり、皆で健康体操を楽しむ場として定着してきている。

【特定交流事業】世田谷区子ども・若者支援課と地元大学生と連携した中高生の居場所（週1回程度）、区児童相談支援課と連携した児童養護施設の退所者支援の場（月1回程度）がある。

【場所貸し事業】レンタルスペース（1時間1100円）。2023年12月現在、定期的な利用としては英語教室やそろばん教室の場などがある。過去には惣菜屋や書道教室などの利用も

あった。

【普及啓発事業】岡さんのいえの活動の発信（広報誌の発行）や普及に関連する事業である。

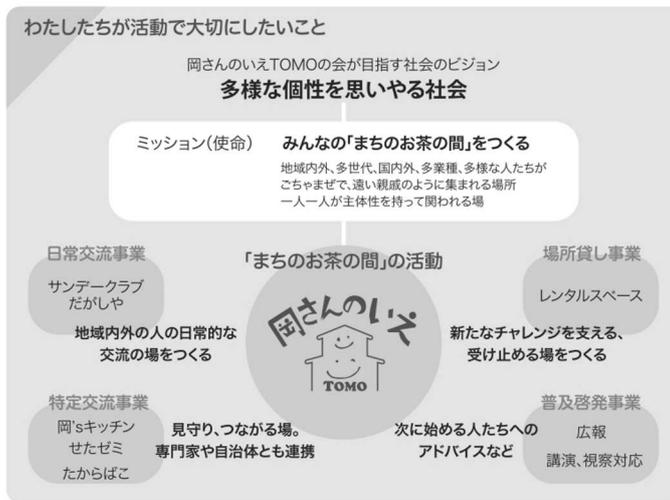


図4 岡さんのいえ TOMO の活動理念と活動内容

3.2.5 COVID-19 への対応

COVID-19 による影響が深刻化した 2020 年。他の居場所がそうだったように⁽³⁾、岡さんのいえも一時期閉鎖を余儀なくされた。しかし、「できないことよりもできることを」と、オーナーと運営メンバーは活動を模索し続けた。HP を充実化させたり、オンラインでの視察受け入れも試みた。また、「開いてるデー」にいつも来てくれていた近所の常連さんに限定して、受け入れを再開した。

岡さんのいえの庭空間の価値を再認識したのもこの時期であった。感染症対策にもなるため、庭を積極的に活用して「開いてるデー」を行ったり、サンデークラブ（鉄道）を行ったりもした。世田谷区では、地価が高いことやライフスタイルの変化なども背景に、庭を有する家が減ってきている。高密度に家が建ち並び、狭い道も多く、ゆっくり立ち止まる場所が十分でない。岡さんのいえの庭空間は決して広くはないが、高密な住宅地に「現代の井戸端」を生み出す可能性があることに気がついた。

3.2.6 前庭のオープン化

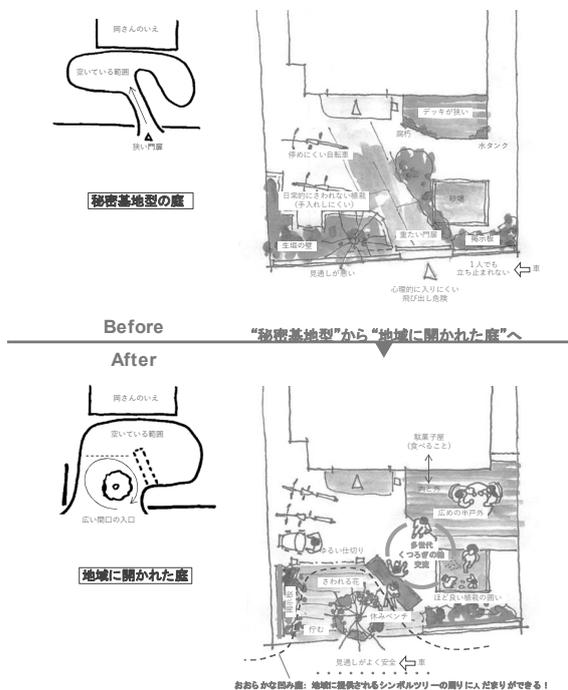
2021 年度からは、屋外空間の改修プロジェクトを進めている。屋外空間の改修は兼ねてからの課題であったが、2015 年の改修時には予算の制約もあり屋内の改修にとどまった。屋外空間には道路に面して開けにくい門扉やブロック塀があるため、「初めての人には入りにくい印象」は否めない。前述の通り、コロナ禍で屋内空間での活動に制約がでて、庭空間の価値を再認識したことが改修の契機となった。

そこで、まずは改修案を関係主体で検討するため、1)岡さんのいえの運営メンバー、2)定

期利用者（惣菜販売・英会話教室・子育て広場など）、3)岡さんのいえと連携している社会福祉専門職（地域包括支援センター、児童館館長、社会福祉協議会など）に参加してもらい、3回のワークショップやグループインタビューを行った。これを通じて、岡さんのいえの屋外空間の魅力（価値）や課題を丁寧に聞き取った（図5）。さらに造園家や防災などの専門家をゲスト講師に迎えた勉強会も行った。こうした一連のプロセスを踏まえて、建築士と共に改修案づくりを行った。シンボルツリーである紫モクレンを残しつつ、ウッドデッキを更新し、「内と外」がよりつながるような計画案になった（図6）。

【魅力】	【課題】	【提案】
歴史 多世代 家庭的な雰囲気 和む雰囲気 古民家 内外をつなぐ縁側 適度な広さ 駄菓子屋 駐輪スペース アクセスしやすさ 貴重な緑 季節感、花、木、土 きれいに手入れ 風情ある灯り 閉鎖的ではない たばこ	小部屋の有効活用 使いやすい看板 開放的-落ち着ける バランス 水タンク不要 緑の整理 手入れしたくなる植栽 ごみ置き場の位置 入りにくい 室内までの段差解消 立ち止まるスペース 見通しが悪い 縁側改修 鉄の門扉が重い 子どもの飛び出しを防ぐ 雨天や冬の活用 たばこ	多目的利用 交流できる現代の縁側 屋根 利用の活性化 手洗い所 休める、座れる場 見通しのよさ 入りやすい雰囲気 多世代が交流できる庭 小部屋の本棚 道路からの出入り× 明るい感じ 入り口までの距離、入りやすい入り口 コンセントの設置 自転車、ベビーカー、歩行器がおける（多い時は区民センター） 交流できる現代の縁側 屋根 利用の活性化 手洗い所 休める、座れる場 屋根 防災 掲示板の工夫

図5 岡さんのいえ TOMO の屋外空間の魅力・課題・提案についての意見一覧（3回のワークショップ結果）



この計画案を実現するため、2022年度、公益信託世田谷まちづくりファンド助成事業「つながりラボ部門」に挑戦した。幸い助成金を得ることができ、建築士と地元工務店の協力を得て縁側改修を行うことができた。さらに、「保健室カフェ」を地域包括支援センターと連携して縁側で行う試みもできた。

そして、今年度。再び上記「つながりラボ部門」助成金を得ることができた。10月に近隣住民と運営メンバーでの意見交換の機会を持ち、屋外空間を地域に「開く」ことの課題も整理して対策を講じた上で、再び建築士と地元工務店の協力を得て、12月に道路に面した部分の改修をした（図7）。現在、前庭オープンを記念したイベントの企画準備を進めているところである。



図7 改修直後の岡さんのいえ TOMO（2024.1撮影）

4 「岡さんのいえ TOMO」が生み出すつながり

3章で、岡さんのいえの成り立ちと取り組み・経緯を紹介したが、ここで紹介したのは、ごく一部の出来事にすぎない。岡さんのいえのような小さな居場所にとって、つながりという観点では、大きなトピックよりも、日常のささやかな出来事の方が大事だと思われる。ささやかな出来事の積み重ねこそがつながりを生み育むと思われるからである。その意味で言うと、ここでの主題であるつながりを伝えるには、日頃の活動を担っているオーナーや運営メンバーが、岡さんのいえで繰り広げられる日常の出来事を彩り豊かに語る方が良いでしょう。が、ここでは、著者なりにつながりという観点から岡さんのいえの空間・運営・利用の特徴を考察し、岡さんのいえが生み出すつながりを考えてみたい。

【空間】戦後、この家は個人の住宅であり、岡さんらが子どもたちに英語やピアノを教える教室でもあった。そのため、岡さんのいえとしてオープンする前からこの家のことを知り愛

着をもっている人がいる。岡さんのいえとして開いているのを知り、訪れ、懐かしく思ってくれる人もいる。過去の記憶を継承した場所として物理的に存在することで、時間を超えたつながりを生む場所になっている。

地域共生のいえとして開設後は、空間を少しずつ外に向かって開いてきた。地元建築士や工務店、企業、財団など様々な人の協力を得ながら、複数名で使いやすいキッチンにしたり、縁側をつくったり、ブロック塀をなくすなど、10年以上かけて少しずつまちに開いてきた。こうして生み出された空間の質は、いわゆる「～センター」などの従来の公共施設とは異なる。地域住民全員にとってではないが、アクセスしやすく、居心地の良い場所と感じて訪れる人がいる。地域包括支援センターは、日頃相談業務などを行なっている場所では地域住民が気軽にきて会話することが難しいとの課題意識から、岡さんのいえに出向き「保健室カフェ」をスタートさせた。何気ない会話のなかから、暮らしの困りごとや将来の不安などについて相談を受ける場になっている。

【運営】現在、主たる運営メンバーは15名ほどである。オーナーをはじめ、私を含めた運営メンバーの殆どが地域外に住んでいる。開設初期からのメンバーである高齢の男性陣も地域外に住んでいる。しかし、活動を続けるなかで、近隣に居住する運営メンバーも少しずつ増えてきた。ゴミ出しや鍵開けといった手間がかかることも近隣の人が手伝ってくれるようになった。なお、運営に関しては、オーナーのAさんがキーパーソンとして大きな役割を果たしている。Aさんは、かつては区内のプレーパークの世話人であり、ここでの団体運営ノウハウや人的つながりが岡さんのいえでも活かされている。

また、社会福祉協議会や地域包括支援センター、児童養護施設、児童館、小学校、行政、大学生や大学教員など、多様な専門機関とも連携しながら運営をしている。これにより、専門機関が直接手の届かない地域課題、制度の狭間にある住民のささやかな声をすばやく受け止められる場となっている。そして何かの時には専門機関につなげる機能も果たしている。

さらに、つながりという観点で言うと、運営メンバー同士のゆるやかな見守りについても指摘しておきたい。開設初期から関わる運営メンバーのなかに、一人暮らしをしているシニアの男性がいる。何かあったときには運営メンバーが気かけ、声をかけるようにしている。

【利用】取り組みの内容は、担い手やその時期の地域ニーズによって変化がある。3章で紹介したように、初期は子育てサロンが中心であったが、今は日常的な交流の場や中高生や児童養護施設退所者といった人たちの場へと変化している。

利用者としては、地域住民を中心に年間2000人ほどが訪れる。ただし、人数の多寡だけでは表現できない居場所としての価値があると思われる。高齢者の認知症の発見につながったり、赤ちゃん連れの親子や会社で心に傷を負った人の一息つける場所にもなっている。

また、場所貸し事業においては、近隣の集合住宅に住む人が、自身の集合住宅の集会室や公共施設ではできないからという理由で、岡さんのいえを借りて惣菜販売や英語教室を始めるケースもある。このように地域住民の自己実現の場としての役割もある。

以上をまとめると、過去の記憶を継承した場所であること、時間をかけて少しずつ地域に開いてきた場所であること、運営メンバーの多様性と専門機関との連携、キーパーソンとしてのオーナー、一人暮らしであるシニアの運営メンバーへのゆるやかな見守り、取り組みが柔軟であること、利用者が多様であり制度の狭間にある人も受け入れていること、地域住民の自己実現の場にもなっていることなどが岡さんのいえの特徴であると考えられる。

ではこれによってどんなつながりが生まれているか。過去の地域の物語を知る人、地域内外の多様な人、地域の多世代・多様な個性をもつ人、制度の狭間にある人、こうした人たちをゆるやかにつなげる場所になっていると思われる。空間としては小さく、つながる人数としては決して多くはないが、広く市民を対象として一律の整備と運営がされている従来の公共施設とは異なる質のつながりを生み出している。

5 おわりに

本稿では、地域共生のいえである岡さんのいえを中心に、その取り組みを紹介し、空間・運営・利用の特徴をつながりという観点から居場所の特徴を考え、小さな居場所ではあるが、多様な人のつながりが生まれていることを考察した。

一つ一つの居場所が生み出すつながりは数でみれば多くはないかもしれないが、地域に居場所が点在することで、重層的なつながりを生み育むことができる。地域に多様な居場所があることで、住民は自分にあった居場所を見つけることができる。小さな居場所も、地域での暮らしを楽しく安心できるものとする可能性があると思われる。実際に足を運ぶことができ、誰かと話すことができる、人とのつながりを感じられる場所があることは、孤独・孤立対策としても意義があるだろう。孤独・孤立が大きな社会課題となっている今日、都市計画・まちづくりには、こうした居場所を都市や地域のなかにどのようにつくり、育て、広げていくかが問われている。

本来であれば、著者自身、一研究者として岡さんのいえに関わっている以上、この論考で求められているような孤独孤立に対する居場所の価値について、エビデンスを持って示さなくてはならないと反省している。昨年より、筑波大学の藤井さやか先生らが中心となって立ち上げた研究会に参加し、「空き空間を活用した社会的孤立を解消・予防する「つながる場」の形成実態と展開可能性」(科研費基盤 B・2023-2027) と題して研究を進めているため、今後の課題としてしっかり検討していく所存である。

【補注】

- (1) 一般財団法人世田谷トラストまちづくりの事業担当者にメールにて問い合わせ、回答を得た。
- (2) まちづくりの場で活躍できる人材育成を目的とした講座。2007年、「地域共生のいえコーディネーター養成講座」の舞台に岡さんのいえが選ばれた。これをきっかけにAさんに誘われ、継続して関わっているメンバーがいる。
- (3) COVID-19による居場所の影響については、東京ボランティア・市民活動センター(2020)「【新型コロナウイルス】居場所活動団体向けアンケート調査結果報告書」、<https://www.tvac.or.jp/download/file/w4qjosb3HyAi.pdf> に詳しい。

【参考文献】

- 1) 一般財団法人世田谷トラストまちづくり HP : <https://www.setagayatm.or.jp/index.html>、(2023年12月閲覧)
- 2) (一財)世田谷トラストまちづくり(2019)「2019年度都市住宅学会・業績賞概要書 住まいを活用した住民主体の地域マネジメント「地域共生のいえ」」
<http://www.uhs.gr.jp/annai/gsyo/g19-02.pdf>
- 3) 後藤智香子(2016)「住民主体による私有空間を活かしたまちづくり—地域共生のいえづくり支援事業を中心に」、小泉秀樹編『コミュニティデザイン学』、東京大学出版会、pp157-193
- 4) 後藤智香子・角屋ゆず・金子有太(2018)「岡さんのいえ TOMOにおける多主体連携による改修工事プロジェクトの試み—住宅を活用したコミュニティスペースの改修方法に関する研究—」、日本建築学会技術報告集(58)、pp1245-1250
- 5) 東京ボランティア・市民活動センター(2020)『みえてきた！未来につながる地域の居場所』
- 6) 高階麻美・後藤智香子・新雄太・近藤早映・泉山墨威・吉村有司・小泉秀樹(2020)「生きづらさを抱えた人の居場所づくりを通じた支援の実態と可能性:インフォーマルな居場所に焦点を当てて」、都市計画論文集 55(3)、pp968-975
- 7) 日本建築学会(2010)『まちの居場所—まちの居場所をみつける/つくる』、東洋書店